

ながと日記 ぱーと17

長門市長 松林正俊



くじら考

今回はくじらについて考えてみたいと思います。わが長門市はご存知のように長州古式捕鯨の基地でありましたが、わが国の近代捕鯨発祥の地でもあります。日露戦争勃発の契機ともなったロシア皇太子襲撃事件「大津事件」後の帰国の途、日本海を悠々と泳ぐくじらの群れに驚いたロシアの艦隊がノルウェー式捕鯨により捕獲を始めたのをきっかけに、中国、韓国などととも日本も日本海での捕鯨に乗りだします。その日本最初のノルウェー

式近代捕鯨の会社が明治32年、近代捕鯨の祖と云われる岡十郎（福栄村）、山田桃作（三隅町）といった人たちによって仙崎で設立されたのです。最近になって当時の詳細が、河野良輔前県立美術館長の研究によって明らかになりましたが、共同経営を呼びかけられた通鯨組の網元たちが鯨組従業員の失業を懸念し辞退したという事実は、労使を超えた鯨組の絆の深さと人情を感じさせ興味深いものがあります。このように長門市とくじらの深い関係は独自の文化を育み、鯨墓・鯨回向にみられるように人々と鯨のやさしい歴史を今に残して

います。「鯨一頭七浦にぎわす」と言われたように、くじらは人々の生計を支えたばかりか、日本人の食生活にも大きく寄与してきました。食用として日本人のタンパク源を補っただけでなく、鯨油や櫛など日用品としても余すことなく利用されてきました。くじらの利用方法は、四方海に囲まれた狭い国土での農耕を余儀なくされた日本人の工夫と知恵の文化の凝縮であると言っても過言ではありません。ご存知のように、現在モラトリアム（商業捕鯨の一時停止）により調査捕鯨しか許されておりません。日本鯨類研究所の調査により

ますと、現在地球上にはミンククジラ100万頭を筆頭に200万頭以上の鯨が生息し、年間を通じて全世界漁獲量の3〜5倍の魚を食べていると云われています。計画的な捕獲により食物連鎖のバランスを回復し海洋資源を守るといのが、日本が商業捕鯨の再開を唱える大きな理由です。海の資源と最も上手につき合ってきた日本民族の歴史と将来を、全世界に訴える場でもあるのがIWC（国際捕鯨委員会）なのです。

総合公園に総合案内板

長門市総合公園入口に、公園内の施設を紹介する総合案内板が設置され、11月3日除幕式が行われました。

この案内板は、簡保資金の収益金により建てられたもので、高さ幅とも2m。上部に太陽電池のデジタル時計、中央に施設の位置を示した全体図が表示され、文化ホール、アリーナ、芝生広場、幼児広場などが写真で紹介されています。



むら・まち交流体験ツアー

くじらとみそ作りを体験

長門大津管内でつくるむら・まち交流研究会の「むら・まち交流体験ツアー」が11月9日・10日、洪木の農村婦人の家で行われました。

参加したのは、下関市や小野田市、北九州市などから20人。こんにやく作りでは、婦人グループ「三十路会」の指導で、こんにやくを切ったり、ゆでる作業などを体験しました。作業終了後には、三十路会手作りの料理による夕食会も開かれ、



お互いに交流を深めました。